

Neues in Nara

Nr.80

2022年6月30日



奈良国立博物館前にて
神戸・奈良両日独協会の皆様

Japanisch-Deutsche Gesellschaft Nara (JDG-Nara)

奈良日独協会 (会長 河野良文) 奈良市大安寺 2-18-1 大安寺内

Tel/0742-61-6312, Fax/0742-61-0473

<http://www.daijanji.or/jdgn/index.html>

編集：林 (hayashiy@zeus.eonet.ne.jp) 峯本 (hmine-24@m3.kcn.ne.jp)

編集委員より：会員の皆様からの積極的なご投稿をお待ちしています！

●行事予定

1. 2022年度(令和4年度)奈良日独協会総会

コロナ禍のため書面決議の結果、すべての議案が原案通り承認、可決されました。

2. ビア・アーベント(当初予定7月24日)は、密集が避けられないことから、本年も残念ながら中止することにしました。 来年を期したいと思います。

3. 神戸日独協会との交流会

5月29日(日)午後、神戸日独協会から栢田義一会長以下11名来奈され、当会の会員14名とともに、奈良国立博物館で開催中の「大安寺のすべて」展を河野会長の詳細にわたる解説のもと、熱心に鑑賞頂いた。その後、奈良コンベンション・センターに移動して歓談、交流・親睦を行った(上記写真参照)。

4. 映画会とシュタムティッシュ開催予定

7月10日(日)13:30~16:00、大安寺「獅子吼殿」にて、通算第4回「映画会」と同第27回「シュタムティッシュ」を開催します(詳細決まり次第、別途ご案内します)。

●会員の土谷真理子さんから寄稿頂きました。

「オーバーアマガウのキリスト受難劇と COVID-19」

ミュンヘン大学に交換留学生として在籍中タンデム(外国語を教え合うパートナー)になったドイツ人学生のひとりがオーバーアマガウの出身者でした。夏休みに彼の故郷へ招かれた際、世界的に有名な受難劇の舞台裏を特別に見る機会を作って頂きました。

ペストの猛威に苦しめられたオーバーアマガウの村民たちが、村からこれ以上の犠牲者が出なければ今後恒久的にキリスト受難劇を執り行うと神に誓いました。その祈りは通じ、神に感謝した村民たちは、1634年に最初の受難劇を開催して信心を示し、以降欠かさず10年に1度、村民総出で受難劇が行われています。

中止・延期されたのは、400年近い歴史において太平洋戦争下など3度だけでしたが、2020年は延期の憂き目にあいました。奇しくも、新型コロナウイルスという伝染病の猛威によってです。村民の落胆は計り知れません。ようやく今年の5月から10月にかけて振替開催が実現し、400年前と変わらず神へ感謝が捧げられています。この度はコロナ禍終息の祈りを託した、特別な舞台となっていることでしょう。



天使の衣装



タンデムの学生
マックス

●会員日より

武舎一夫さんから

「東西ベルリン2つの歌劇場で体験したアクシデント」

コロナ禍直前の2019年12月に久しぶりにドイツを訪問した。ハンブルク国立歌劇場、ベルリン・ウンター・デン・リンデン歌劇場、ベルリン・ドイツ・オペラで興味のある公演があり、幸運なことにインターネットで三公演のチケットを入手することができたからだ。30年前はオペラチケットの入手には郵便、FAX、電話、テレックスしか通信手段がなく、大変な苦勞をしたものだが、本当に便利な世の中になったものである。

東西ドイツ統一後、ウンター・デン・リンデン歌劇場の公演は何度か見る機会があったが、旧西ベルリン・シャルロテンブルク駅近くのベルリン・ドイツ・オペラの公演を見るのは33年ぶり。数年前東京新国立劇場で3年がかりで上演されたワーグナー「ニーベルングの指環」四部作公演で、ローゲ、ジークムント、ジークフリートとテノール3役をひとりで歌ったステファン・グールドがベルリン・ドイツ・オペラのワーグナー「トリスタンとイゾルデ」公演に出演予定だったので、彼のトリスタンをぜひ聞きたいと思ったのが今回のベルリン訪問の目的のひとつだった。しかし、オペラには様々なアクシデントがつきもので、病気による歌手のキャンセルなどは日常茶飯事。30年以上前に見たワーグナーの「ニュールンベルクのマイスタージンガー」で、主役のテノール歌手の最悪の喉のコンディションを押して5時間の痛々しい公演の記憶が脳裏をかすめ、今回の公演でもなにかアクシデントがあるのではと危惧したが、それは全くの杞憂だった。主役歌手達は絶好調で素晴らしい演奏を聞かせてくれた。しかし、前日ウンター・デン・リンデン歌劇場で見たサン・サーンス「サムソンとデリラ」公演で事故が発生した。舞台装置が故障し、第三幕は舞台なしの公演となってしまったのだ。このオペラ、敵に捕らえられ、鎖で繋がれたサムソンが渾身の力で大理石の柱を引き倒し、宮殿が崩れ落ちるところで幕となるのだが、残念ながらこの場面の演出を見ることができなかった。

コロナ禍に加え、ロシアのウクライナへの侵略戦争の影響で、訪独は今しばらく難しそうだ。できるだけ近い将来オペラ鑑賞のために再びドイツの諸都市を訪問したいと考えているが、いったいいつになるのだろう。



ステファン・グールド氏と筆者